いつしかさわやかな風がわたり、透明な日差しが降りそそぐ季節がやってきた。法面の木々もかすかに色づき始めた 10 月、すわっ、今年はどんな紅葉が見られるのかと胸はたかなり思わずカメラを構える。「紅葉・黄葉」は秋の季語、「木の実」は晩秋の、「落ち葉」は冬の季語、そんな図式で自然の移ろいを眺めようとすれば、混乱するばかり。気の早いハナミズキは 10 月初めにはすっかり色づき赤い実をつけ、11 月には落葉が始まる。その頃には法面のケヤキも色とりどりに黄葉しても、なぜか管理事務所の前のケヤキは遅れている。肝心のモミジは色づきが一番遅い。中央広場の林の中のモミジは日が当たる部分のみ紅葉しても、下半分のまだ緑の葉。バス停裏のモミジに至っては、ようやくてっぺんが色づき始めたばかり。

それではと対岸のプロムナードからわが団地を眺めて見れば、所々黄葉している木々はあるが、常緑樹が多い東法面は全体的には“黒い森”のよう、“全山紅葉”の幻想ははかなく消えさる。

対岸からの眺め　(左) 3 号棟、2 号棟付近　　(右) 1 号棟から北東法面。右端はブリリア

都道の両側にはクスノキの街路樹が並んでいる。その向こう側が当団地東法面。　(11 月 17 日)

しかし、居住区内はトチノキやハナミズキの落ち葉が毎日のように降り注ぎ、シルバーさんの掃除も追いつかないほど。まことに自然の営みは一言では言い難く、「秋」「晩秋」「冬」がともに、何度も何度も季節の移り変わりの波が押し寄せてくるような感じである。

このような状態なのであわてても仕方がない。まず印象に残った木の実や紅葉から見ていくことにしよう。

ウメモドキ (実)　モチノキ科モチノキ属　花期；6 月　実；9～10 月以降

湿った落葉広葉樹林内に自生する日本固有種で落葉低木。団地内では 1 号棟北側入り口脇にある。

実の美しさはとやかく説明するまでもなく写真を見ていただければ納得がいく。雌雄異株で、9～10 月頃に直径 5 ミリほどの赤い球形の実をつけ、葉が落ちても早春まで残る。その姿を紅梅の花に見立ててウメモドキの名がついた。

ウメモドキの実　(10 月 21 日)

この赤い実は小鳥の好物で、小鳥に食べられ運ばれて、中の種が糞とともに排泄されてその地に芽を出す。赤い果肉部分に発芽を抑える成分が含まれているため、もし種をまいて増やそうと思ったら、果肉を除き、種を出して撒かなくてはならないとの事。　　（参考；①，⑦，⑧，HP）

カマツカ　(実)　バラ科カマツカ属　花期；4~6 月　　実；10～11 月に赤く熟す

山地の日当たりのよい林縁などに生える落葉中木。黄葉が美しいとの話で、2 年前のシンボルゾーン整備の一環として中央広場に植えた落葉樹の 1 本。この秋には赤い実がたわわになった。

カマツカの実　(11 月 1 日)

名の由来は、樹の材が固く丈夫なため鎌の柄（カマノツカ）に用いられたためとのこと。また別名に“ウシゴロシ（牛殺し）”の名もある。これは、牛が枝の間に引っかかると抜けないくらい丈夫なためとか、牛が暴れないように鼻輪にして牛を引いたため等の諸説があるようだ。

カマツカに関する面白い話はないかとさらにインターネットを検索すると、赤い実を焼酎につけてカマツカ酒を作った話があった。「5 年間仕込んで、コクのある美味しい酒に仕上がった」とある。こんな記事を見ると自分も果実酒を作ってみたくなる。どんな味なのか。図鑑には「果実は薄甘い」とある。さらにインターネットを検索すると、「甘く美味しい。果肉は甘酸っぱく、子供の賞味する山の幸の一つ」とか、「リンゴ風の味で、柔らかくて甘い」とある。しかしまた他のページには「何度食べても美味しいと感じた事がない」との書き込みもあった。味だけは各人の好みもあり、これだけは試食してみないことには何とも言えない。

それでは実をもいで来ようと行ってみたら、数日前には、黄葉した葉は散りかけていたが、実は枝にまだたくさん付けていたはずなのに、赤い実はほとんど落ちてしまっていた。枝に残った熟した実を 2～3 粒ほど取り口に含んでみた。確かに“薄甘”だが、美味いかまずいかは分からなかった。もっとみずみずしいうちに取って食べるべきだったかもしれない。　　（参考；⑥，⑧，各種 HP）

ニシキギ (紅葉)　ニシキギ科ニシキギ属　花期；5～6 月、実；10～11 月に熟す

丘陵から山地の落葉広葉樹林の林の中や、林の淵などに生える落葉低木。紅葉が美しく、庭木や街路樹として植えられる。園芸用のものは枝の翼が発達する。名の由来はニシキギの燃えるような紅葉を豪華な錦の織物にたとえてのこと。

ニシキギ　(11 月 1 日)　北進入路脇

中央公園 7 号棟寄り (11 月 27 日)

7 号棟東側通路脇 (12 月 2 日)

団地内では、中央広場と、7 号棟東側の管理事務所への通路の傍ら、そして、1 号棟北側の駐車場と北進入路の間の土地の、3 カ所に植えられている。団地内の 2 本は後になって分かった。北進入路の傍らに 11 月初めに見つけた時は、その一部が紅葉しているだけで、実はなっていなかった。

ニシキギの枝の両側には翼がある　→

昔、コルク質の枝の翼を黒焼きにして飯粒とあわせて練り、やけどの薬にしたこともあったという、こんな使われ方があったとは驚きです。　　（参考；⑦，⑧）

サザンカ　(花)　ツバキ科ツバキ属　花期;10～12 月

団地内の生垣や広場などに植えられている。もともとは山地の林の中や林の縁に自生する日本固有種の常緑高木で、普通は木の高さは 2～6 メートルになる木であるが、団地内は剪定されて 1～2 メートルに押さえられている。

サザンカ　1 号棟西側(北広場側)　(11 月 28 日)　↑

11 月に入って咲き始めたが、いつも迷うのはツバキとサザンカはどう見分ければよいかということ。それで図鑑から双方の特徴をまとめて見た。

		サザンカ	ツバキ（ヤブツバキ）
花	花期	10～12 月	11～12 月または 2～4 月
	花の大きさ	直径 5～8㎝	直径 5～7㎝
	花の色	白または淡紅色	赤、まれに淡紅色、白色
	花の形状	1 枚ずつ離れている	半開きのようで、花弁が重なる
	花糸	淡黄色で離れている	白く筒状
	香り	ほのかな香り	無し
	花糸と花弁	花弁と雄しべはバラバラに散る。	花糸と花弁が根元で着いて、ポトッと落ちる
葉	葉の大きさ	長さ 3～7㎝、幅 2～3㎝	長さ 5～10㎝、幅 3～6㎝
	葉の形	長楕円形、ふちに鈍い鋸歯	長楕円形、先端とがり、ふちに細かい鋸歯
	葉の質	革質	革質、表面は濃緑色、光沢
実	果実の大きさ	直径 1.5～2㎝ の球形	直径 2～2.5㎝ の球形、緑色
	種子の大きさ	長さ 1～1.5㎝、褐色	長さ 2～2.5㎝

花の大きさは同じ位だが、開ききって淡紅色はサザンカ、半開きで花びらが重なり主に赤色がツバキ。花期が主に年内はサザンカ、春先まで咲いているのはツバキ。花糸（かし；雄しべの柄の部分）が離れていて、花糸、花弁（花びら）がバラバラに散るのはサザンカ、花糸がくっ付いていて筒状で、花糸と花弁がついた状態でポトンと落ちるのはツバキ。葉はサザンカの方がやや小さめ、ツバキはやや大きめで表面に光沢がある。果実もツバキの方が多少大きめ。

サザンカの特徴　；花はよく開いて、雄しべは離れている。　花弁(花びら)はバラバラに散る。

今年のサザンカとツバキはこのように見分けてみましょう。
（ただし品種によっては当てはまらないものもあります。傾向として見てください）

サザンカは江戸の園芸として発展し、今ではその品種はおよそ 300 種にもなるという。団地内にはどんな種類があるのか探してみると、色の違いや花の違いで 3 種類ほどあるようです。図鑑で種名を当てはめてみましたが、間違っていたらごめんなさい。

① 白八重、しべ隠れるが小さくない；北広場ゴミ集積場の北側　　‥‥　セイカイハ（静海波）

11 月 25 日　北広場ごみ集積場

② 淡紅色、八重でしべが小、隠れる；10 号棟西生垣、北広場　‥‥　カンツバキ系緋乙女

11 月 1 日　10 号棟生垣

③ 淡紅色～紅色、しべが大；7 号棟東側、1 号棟西側　　‥‥　タチカンツバキ

11 月 25 日　7 号棟東側

サザンカを見ていくうちにもうひとつの魅力に気付いた。満開の花のゴージャスな感じには圧倒されるが、半分開きかけた花もまた美しい。いや、やはりこちらの方が何ほどか初々しい美しさがある。

11 月 1 日

11 月 17 日　（共に 10 号棟生垣）

（参考；①，⑦，HP）

ツワブキ　(花)　キク科ツワブキ属　花期;10～12 月

ツワブキはもともと海岸の岩の上や崖などに生えている耐寒性宿根草。厚手の葉は海岸の厳しい環境にも耐えうるように進化してきたことを物語る。太平洋側では福島県以南、日本海側では石川県以西の日当たりのよい岩場に野生している。元々は日当たりを好む植物だが半日陰や陰地でもよく育つ。庭などにも古くから植えられ、江戸時代初期の園芸書にも見えるとの事。

当団地では北法面進入路付近を初め、居住区内にも所々植えられている。

ツワブキ　北進入路脇　　11 月 1 日

ツワブキの名は、葉に光沢があるフキの意味の艶蕗がなまったもの。葉柄はフキと同じように、きゃらぶきにして食べられる。フキよりも風味があるらしいが、団地のツワブキは観賞用として植えていますので食べないでください。

ところでツワブキの花は、周囲に花びら(花弁)があって、中は雄しべの塊のようなつぶつぶ。キク科にはよく見かける花の形で、特に不思議にも見えない。しかし、これ全体で一つの花に見えるが、実は多くの花が集まったもの。花びら 1 枚 1 枚のように見えるのがそれぞれ 1 つの花、中のつぶつぶもそれぞれ 1 つの花なのである。本来なら枝の先がさらに枝分かれし、それぞれの先端に花がつくべきのはずが、枝が短く詰まってしまい、多くの花が一つの枝先にまとまってしまったのが、キク科の花なのである。

資料を抜き書きして紹介しても分からない。花を 1 個失敬してきて調べて見ることにした。（花を一個摘んできたら、女房がさっそくコップに水を満たして持ってきて、「さあ、これに挿したら」と言う。いや、そうではないと訳を話すと、「まあ、可哀そう」と冷たい視線を向けてくる。そうなのだ。花を調べるには、時に冷酷に、残酷にならなければならないのだ）

花を輪切りにしてみると、筒状のものがいっぱい詰まっているのが分かる。　(写真右)

さらにそれをバラバラにしてみる。花弁 1 枚が根元の筒から舌のように伸びているので舌状花(ぜつじょうか)という(写真左)。その中ほどに、先が丸まったものが見える。これは雌しべ。(舌状花は雌しべだけで、雄しべはない)。付け根の白い毛は冠毛で、がくの変形したもの。

もう一枚の写真は、花弁が筒状になっていた部分で、筒状花(つつじょうか)という。(写真右)。右側の 2 本は、上から見てつぶつぶだった部分、いわばつぼみの状態。左側の 2 本は、先端が 5 つに裂けて丸まり(開花している)、中に 1 本雌しべが伸びている。こちらには雄しべもあるが、花の中に隠れて見えない。

もう一度、花の全体を見てみる。　(写真右)
周囲には舌状花、中には筒状花が、開花した部分と、つぶつぶのつぼみの状態のものが見える。これら一つ一つが花で小花(しょうか)と呼び、これらが花の部品のように集まって一つの大きな花の形、頭状花序(とうじょうかじょ)となっている。

（参考；②，④，HP。最後の部分は Wikipedia「頭状花序」を参考にしました）

ヒイラギモクセイ　（生垣；花）　モクセイ科モクセイ属　花期;10 月頃

当団地の生垣はベニカナメモチや一部にサザンカなどが使われています。7 号棟と管理事務所、中央広場の仕切りの生垣はヒイラギモクセイが使われています。ヒイラギモクセイはギンモクセイとヒイラギの雑種で常緑の中木、葉は楕円形で先はとがり、葉の縁には棘条の鋸歯(きょし。葉のギザギザ)があります。いつもは何気なく通り過ぎてしまいますが、この生垣にも花が咲くのです。白い 4 弁の花(のように見える)で、かすかな香りがします。キンモクセイのように強い香りではありません、花弁もキンモクセイほど厚ぼったくは感じません。時にはヒイラギモクセイの花を探してみてください。

ヒイラギモクセイ　(11 月 9 日)
7 号棟と通路の間の生垣

（ただし、11 月の剪定であらかた切られてしまいましたが、広場側の端、裏の方にほんの数カ所残っていました）

なお、先ほど“ 4 弁の花 ”と書きましたが、それは間違いで、この花は合弁花に分類されています。それで花を摘んで写真で拡大して見ると、花の付け根がくっ付いているのが分かります。
（次のページにヒイラギモクセイの花と葉を示します）

ヒイラギモクセイの花（花の付け根がついている）

葉の周囲はギザギザ(鋸歯；きょし)がある

何か面白いエピソードがないかなとインターネットを検索したら、地面一面に白い花が敷き詰められた写真とともに、こんなコメントがついていた（要旨）。

「朝のウォーキングしていて、近くの公園でヒイラギモクセイの白い花が、うっすらと雪のように地面に積もっているのに出会った。キンモクセイに比べて、とっても上品な香りだった。柔らかく、ふんわりと漂うかおり。花は星屑のようにかわいく、真っ白の絨毯は雪のように美しかった。

画家・陶芸家　織月紅希氏のホームページより」

文の中から抽象画家のこの女性の感性が伝わってくる。ヒイラギモクセイも生垣ではなく自然樹形に伸ばせばこのようなみごとな落花もありうるのだろう。私もこんな風景に出会ってみたいものだ。しかし、わが団地の生垣はきれいに剪定されているので、いや、きれいに剪定されすぎているので、花付きはほとんど見られず、こんな風景は夢のまた夢。残念だ。　　（参考；⑬，HP）

ヤツデ（別名：テングノハウチワ；花）　ウコギ科ヤツデ属　花期；11～12 月

日本の山地に自生する日本原産の常緑低木。日陰にも強く、公害にも強いので、公園の植え込みにも使われる。当団地では法面にはもちろん、居住区の植え込みの中にも見られる。

ヤツデの花は、小さな一つ一つが花。白い花弁(花びら)が開いています　(11 月 1 日、北法面)

名前のヤツデは、「八つ手」の音読みで、八裂の意味。しかし、8 つに切れ込んだ葉を探しても見つからない。多くは 7 か 9 に裂けているものが多い。小さい葉は 5 裂のものもある。真ん中に切れた葉の 1 本を通し、左右に対象に切れ目を考えるとどうしても奇数になる。ではなぜ「八つ手」なのか。

古事記のなかに、スサノオノ命の「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごめに・・・」という歌があるが、ここでの「八」は、「八雲立つ」は出雲の枕詞で多くの雲がわき立つ意、「八重垣」は多くの垣根を巡らしての意味で、数字の「八」ではなく「多い」という意味。これと同じように、「八つ手」は多くの切れ込みがはいった葉という、日本古来の命名法からきている。

大きさが 20～40 センチもあり、多くの切れ目のある葉は、まさに俗名テングノハウチワと言われるゆえんである。

ところでヤツデの花は、11 月になって咲き始めた。茎の頭の矛先のようなものが、枝分かれし、開花していく様子を並べて見た。(これは一つの花の状態を追ったのではなく、何枚も撮った写真を並べたもの)。

花のクローズアップ写真は初めに示したが、それを見ていただければ分かるように、枝先の球形の花は、これもまた多くの小花が集まって、ひとつの花を形成している。白い 5 枚の花弁(花びら)が開き、その間に雄しべが 5 本見える。「雄しべが先に熟し、雌しべが成熟する前に雄しべが花粉を散らし、自家受粉を避けている」という。このような説明を聞くと、何やらヤブガラシに似ているが、こちらは一つの花の寿命はすぐに散らないで 1 週間ほど咲いているという。そして、年を越して 4～5 月頃に赤紫褐色から黒紫色に熟すとのこと。

この花には一種独特の臭いがあり、ハエ類がよく集まるという。写真にはアリが群がっているのが見える。花の少ない冬には貴重な密源なのだろう。　　(参考；①，②，⑦，⑧)

ススキ　(穂)　イネ科ススキ属　　花期；8～10 月

秋の七草のひとつで、尾花の名でも親しまれている。また十五夜のお月見など、ススキは日本人の暮らしになじみが深い。ススキはカヤ葺き屋根にも使われたので、「茅(かや、萱)」とも呼ばれている。

ススキは山野のいたるところに生える高さ 1～2 メートルの大型の多年草。団地内にも、周辺の手入れの悪い空地などに生い茂っている。

3 号棟脇のススキ(左)　　モノレール駅への歩道の傍ら(右) ススキとセイダカアワダチソウが見える

ススキはいたるところで雑草扱いだが、見ようによっては美しい。　　(11 月 5 日)

ススキの美しさは、やはり何と言っても穂がふわりとひらき風になびく風情だろう。詩歌に歌われるのもその風情だろう。と言って、言い訳になるのだが、私も美しい穂のススキばかりを追いかけて、本来の花を見逃してしまった。花期は初めに記したように 8～10 月なので、9 月頃の茶色がかって、穂が開いていない時期を狙うべきだった。穂がふわっと開いているのは、とうに花は終り、実になって、風に飛ばされていくのを待つばかりの状態である。花を見るにはまた来年を待たなければならない。そんな訳で、ススキの花をご紹介できずに申しわけありません。

（参考；④，⑰）

ススキの穂の拡大。長い柄の先の実と、その付け根にも柄が短い実がつく。

セイダカアワダチソウ (花)　キク科アキノキリンソウ属　花期;10～11 月

北アメリカ原産の多年草。明治の中頃に観賞用として持ち込まれたものが野生化し、特に第二次大戦後に急激に広まり、代表的な公害草となった。川の土手や荒れ地に大群生している。当団地内には見られないが、周辺の空地、特に旧わんにゃん跡地や多摩モノレールに行く道の脇など、手入れされずに放置されている場所に大群生している。

モノレール駅への道の傍らのセイダカアワタチソウ (11 月 5 日)　右のような円錐花序が特徴

セイダカアワタチソウの繁殖力が強烈なのは、他の植物の成長を抑えるような化学物質をだして、自分の勢力範囲を拡大していくため。一時は花粉症の元凶として騒がれたが、元来虫媒花であり、花粉症とは無関係であるとのこと。

この植物の和名は“背高泡立草”で、まるで泡がたったような黄色い花穂の様子や、ずば抜けて草丈が高い事によったもの。

では実際にどんな花なのか、カメラを近づけズームアップして見る。

多くの花の集団のようだが、あまりに密集しているのでよく分からない。それで数個ちぎってみた。そうすれば一つ一つの小さな花が見えてくる。つまりこの小さな花がたくさん密集しているので、泡が立ったように見えていたのだが、実はこの小さな花も、先にツワブキのところで見たように舌状花と筒状花の集まりなのである。花の部品のような小花が集まりひとつの花の形をつくり、さらにこの小さな花が密集して塊のようになっているのがセイダカアワダチソウなのである。　　（参考；④，⑪）

【 実･種 】

イロハモミジの種；2 枚羽のように見えるが、手に取ってみるとバラバラになる。 (11 月 14 日)

タカサゴユリの種　；この筒の中に薄い種がぎっしり詰まり、風に飛ばされていく。(11 月 19 日)

ヤブランの実；あの上品な感じの紫の花が、こんな真っ黒の実をつけるのです。(11 月 9 日)

ワルナスビの実；これは一体何の実だろう。見つけた時すぐには分からなかったが、よく見ると茎に鋭い棘。空き地に我が物顔にはびこっていたワルナスビのなれの果てなのです。花はナスの花に似ているので“ナスビ”の名がついていますが、実は全然ちがってこんな黄色い実なのです。(11 月 1 日)

〔トピックス〕

チガヤ；本来は 6 月頃に白い穂をつけるのだが、この場所だけ空き地一面に風に揺れるのが見られた。
(下左)　旧わんにゃんビル跡地　(11 月 17 日)

ヒラドツツジ；ツツジは本来は 4～6 月に開花するものだが、南広場や団地の南口付近のヒラドツツジが、11 月に所々咲いてた。　(下右)　南広場　(11 月 25 日)

この他に、11 月下旬に見て回った時に、5～8 月にかけて咲くはずのシモツケが最近咲いた形跡もありました。季節外れの花を俳句の季語では、「帰り花」「忘れ花」「狂ひ花」などとも言うようですが、どうもたまたまその一輪だけ、一本の木だけ咲いたというよりも、かなり一面に咲いている場合も見られます。原因ははっきりしませんが、最近の気候が暖かかったということなのでしょうか？

昆虫　；花を見て回ると、よく昆虫に出会います。今回の昆虫は・・・

ツワブキの蜜を吸うハラナガツチバチとハナアブ

セイダカアワダチソウの蜜を吸うアサギマダラとハラナガツチバチ

○　ハラナガツチバチのオスは針はなく刺す真似をするだけで無害とのこと。ツチバチの種類は不明。

○　アサギマダラは、11 月 18 日の朝日新聞「読者の写真」に「旅するチョウ」として紹介されていた。この写真は 10 月 23 日磐梯町で撮ったもの。

【参考書】

①　『大人の園芸　庭木・花木・果樹』　濱野周泰監修　小学館

②　『花の風物誌』　釜江正巳著　八坂書房

④　『山渓ハンディ図鑑１　野に咲く花』林弥栄監修

⑥　『山渓ハンディ図鑑 3　樹に咲く花　離弁花 1』山と渓谷社

⑦　『山渓ハンディ図鑑 4　樹に咲く花　離弁花 2』山と渓谷社

⑧　『葉っぱ・花・樹皮でわかる樹木図鑑』　池田書店

⑪　『緑の侵入者たち　帰化植物のはなし』　浅井康宏著　朝日選書

⑬　『山渓ハンディ図鑑 5　樹に咲く花　合弁花・単子葉・裸子植物』山と渓谷社

⑰　『草木花歳時記　秋』朝日新聞社

（石川）